コレスポンダンスによる関係性の生成
－デンマークの障害者生活施設および成人学校における人類学的研究－

小野瑠夏
社会システム研究科

論文要旨

本研究は、障害者福祉の現場における支援者と被支援者の関係に着目する。本研究の中心概念である「コレスポンダンス（応答）」は、対話や行為のやり取りを通じて相互理解を深め、関係性を築くプロセスを指し、支援の場において重要な役割を果たす。本論では、デンマークにおける支援の現場での事例をもとに、「コレスポンダンス」の積み重ねがどのように個別性や対等性を確立し、インクルーシブ・コミュニティを拡張・創発させていくのかを考察する。

2022 年に執筆した卒業論文では、包摂を目指したまちづくりである「ともに暮らす街-わかぞのインクルーシブ・コミュニティ（WinC）構想」の実践をもとに、インクルーシブ・コミュニティの成立要件として「対等性」と「個別性」の重要性を論じた[小野 2022]。「個別性」とは、コミュニティの参加者が互いの人格を認め合い、属性にとらわれずに個人として理解し合うことを指し、「対等性」とは、個別性を認識した上で、対等な立場でコミュニティに参加し、意見を交換できる状態を指す。

これをふまえ、本研究ではデンマークの二つので参与観察をおこなった。一つ目の調査地であるスーロン（Landsbyen Sølund）は、重度知的障害者が「実家」のように安心して暮らすことを目指す大型居住施設であり、二つ目のエグモントホイスコーレ（Egmont Højskolen）は、全校生徒の約 4 割が何らかの障害を持つ成人学校で、障害者を含むすべての学生が共に学び、多様な価値観に触れながら将来の選択肢を広げる環境が提供されている。これらの事例をもとに、本研究では支援の現場における関係性の構築過程を詳細に分析し、インクルーシブ・コミュニティにおける「コレスポンダンス」の役割を考察する。

「コレスポンダンス」とは、反応が双方向に交わされることで関係性が深まり、互いの個別性や対等性を認識し合うプロセスを指す。コレスポンダンスは、一度きりの単なる相互応答ではなく、はなく継続的におこなわれ、多様な人々を巻き込みながら拡大していく性質を持つ。事例の分析

から、第三者が介入することでコレスポンダンスへと発展し、関係性が変化することが確認された。たとえば、スーロンでは、年に一度のフェスティバルを通じて、障害者と地域住民が交流し、新たな関係が築かれる機会が提供されている。また、エグモントホイスコーレでは、障害者がマイノリティではない環境が整えられ、他者を認めながら共に生きていく知恵を獲得する場となっている。また、コレスポンダンスは一回限りの出来事ではなく、連続的に積み重ねることで、インクルーシブ・コミュニティの拡張や創発を促すことが示唆された。

支援者と被支援者の間には、価値観の違いや役割の不均衡による葛藤が生じることがある。しかし、本研究では葛藤を必ずしもネガティブなものとせず、コレスポンダンスを深化させるために必要なものと捉えている。お互いに葛藤解決するために、お互いの自律性を尊重することでさらなるコレスポンダンスを生み出され、相互理解や信頼関係を形成する。コレスポンダンスの過程で生じる葛藤は、関係性を深めるための重要な要素である。

さらに、コレスポンダンスは単なる二者間の関係にとどまらず、多様な人々を巻き込みながら拡張・創発する性質を持つことが明らかになった。例えば、スーロンにおけるミュージックフェスティバルは地域住民を巻き込むだけでなく国外からの来訪者を迎えるような障害者のための大きなフェスとなった。また、映画「リース遠征隊」で撮影された北欧最高峰への登山は、不可能と思われたことへの仲間との挑戦であり、これらは普段のコレスポンダンスから創発が起こった事例である。ここでは、支援者と被支援者の間の関係性は固定的なものではなく、状況に応じて役割が変化することが観察された。たとえば、エグモントホイスコーレでは、共同生活の中で支援の受け手が支援を提供する立場に回ることがあり、支援関係が一方向的なものではなく相互的なものとして機能することが確認できた。

本論文で述べた、コレスポンダンスは必ずしも「支援者/被支援者」、「健常者/障害者」の間だけで存在するものではなく、さまざまな社会の人間関係においてインクルーシブ・コミュニティを成立させるために不可欠なものである。